

フィリップ・ソレルスとグノーシス

著者	小山 尚之
雑誌名	東京海洋大学研究報告
巻	10
ページ	102-112
発行年	2014-02-28
URL	http://id.nii.ac.jp/1342/00000484/

フィリップ・ソレルスとグノーシス

小山 尚之*

(Accepted October 18, 2013)

Philippe Sollers and Gnosis

Naoyuki KOYAMA*

Abstract: This article is a translation of Philippe Sollers's *La Connaissance comme Salut* into Japanese, which tells us the relationship between Sollers and Gnosis. In his novel *Les Voyageurs du Temps*, Sollers quotes a lot from the archives of Nag Hamadi. For Gnostics, Relief comes as knowledge when man hears and incarnates Word. Word incarnated, Death, and Resurrection are not only limited to Christ, but also happen repeatedly for all who have replied to the call of Word. Philippe Sollers, in his writings, practices lots of citations from the beginning of his career. It seems that he reinterprets his method of writing in the light of Gnosis. When he quotes from his favorite authors, he incarnates Word. At that moment, resurrection is made inside and he wins the death.

Key words: Sollers, *Les Voyageurs du Temps*, Nag Hamadi, Gnosis, word, incarnation, resurrection

はじめに

2009年に刊行されたフィリップ・ソレルスの小説『時間の旅人たち』はそれまでのソレルスの著書と同様に数多くの引用の織物から成り立っている書物である。しかしこの小説と従来のかれの著書との間にはニュアンスの変化がある。この小説ではナグ・ハマディ文書と呼ばれるグノーシス文書からの引用が多くちりばめられているのだ。小説の扉に銘句として掲げられているのがグノーシス文書のひとつ『フィリポによる福音書』からの引用である。小説の後半になるとグノーシス文書からの引用がぐんと増える。グノーシスの研究者アンリ＝シャルル・ピュエックにも言及されている。一体こうしたグノーシス文書からの引用は何を意味しているのだろうか？ グノーシスはソレルスにとってどのような価値を持っているのだろうか？

幸いなことにソレルスは別の所でグノーシスについてかなり突っ込んだ発言をしている。雑誌『リーニュ・ド・リスク』 *Ligne de risque* においてフランソワ・メロニス、ヤニク・エネルらのグノーシスに関する問いにたいして、ソレルスは詳細に返答しているのである。この質疑応答は雑誌『ランフィニ』 *L'Infini* に「救済としての知識」という題で転載された(2009年夏号、pp.33-45)。わたしはグノーシスそのものにたいする興味からというよりも(それにわたしはグノーシス主義の専門家でもない)、『時間の旅人たち』というソレルスの小説の理解を深めるために、グノーシスに関するかれの発言を以下翻訳することにした。ナグ・ハマディ文書に関してはすでに岩波書店から翻訳がでている

が(『ナグ・ハマディ文書』全4冊、荒井献・大貫隆責任編集、2007年)、この質疑応答で用いられているナグ・ハマディ文書からの引用についてはフランス語訳からそのままわたしが日本語に翻訳することにした。

ところで『ランフィニ』誌上では問いは問いとしてひとつに先にまとめられていて、あとにソレルスの答えが延々と続いている。しかしそれではソレルスの発言がその問いのどれに対応しているか非常に分かりにくい。そこでわたしはここに翻訳するさいに、あえて問いと答えを有機的に絡ませて訳したことをお断りしておく。

救済としての知識

———おそらく4世紀の終わりに埋められ、以後失われたものと信じられてきた文書が、1945年12月エジプトのナグ・ハマディで発見されます。これが、その時代まで評価されず無視されてきたグノーシス派の回帰です(ひとつとは何にもまして、反異端論者のサラミスのエピファニオス(およびその著『菓籠——パナリオン(370年頃)』)といった敵対者たちを通してグノーシス派のひとつとを知っていただけでした)。第二次世界大戦のちょうど後という、この、時間の明確な点での発掘に、あなたはどんな意味を与えていますか？(以下フランソワ・メロニス、ヤニク・エネルによる質問が続く)

Ph. ソレルス : グノーシス派のひとつとは、わたしが「時間の旅人たち」と呼んでいるひとつのことです。わた

* Department of Marine Policy and Culture, Division of Marine Science, Graduate School, Tokyo University of Marine Science and Technology, 4-5-7 Konan, Minato-ku, Tokyo 108-8477, Japan (東京海洋大学大学院海洋科学系海洋政策文化学部門)

しの新刊書は「時間の旅人たち」をタイトルとしています。この本の冒頭の銘句、「幸いなるかな、在ったという以前に在るものは。というも在るものは、在ったし、在るだろうから」は『フィリポによる福音書』に由来します。この小説では、特に第二部で、グノーシスのことがあからさまに話題となります。1945年、エジプトの農民たちがナグ・ハマディのグノーシス文書にたまたま出くわすとき、わたしは9歳です。この発見、そしてこれにすぐ続くクムラン文書の発見が、わたしと交わるにはまだ多くの年月が必要となるでしょう。

第二次世界大戦は新しい時代の始まりを画しています。地球規模の時代です。これはいまだそのようなものとして考察されてはいませんが。あなた自身も『解放への前奏』のなかで指摘なさっているように、この新しい時代は「近代」les Temps Modernes^{モダンイアリザシオン}という時代を大きくはみ出しています。このことに関してはグローバル化という言葉が口にされていますが、より正確にはこれを不浄のグローバル化と呼ぶべきでしょう。われわれの注意を引くのは、スターリン、ヒトラー、広島といった名（この順序で引用するのが適切です）の共存が覆っている、あの異常で不吉な集中性です。しかし同時に時間の折り目そのものなかにいくつかの晴れ間もあります。ナグ・ハマディ、クムラン、またラスコーの洞窟などです。ラスコーの洞窟をわたしはとても若いときに見ました。それはわたしにとって真の啓示でした。やがて、インド、中国といったすべての大地が、西洋の形而上学を超える思想とともに、到来するときが来るでしょう。

グノーシス派のひとつに関しては、その発見者であるアンリ＝シャルル・ピュエックに敬意を捧げるべきです。かれの名は奇妙なことに辞典にありません。しかしかれは大部な本を残しています。『グノーシスと時間』、それから『トマスによる福音書』についての注釈、最後に『マニ教』です。ピュエックがこんにち忘却のなかに葬られているとまで言わないにしても、消印が押されているというのはスキャンダラスなことです。グノーシス派の福音書がいまやプレイアード叢書で読まれているというのに、その発見者は記憶から消されているのです。われわれがグノーシス派の文書を意のままに用いているとしても、そのことをわれわれはこんにち検閲を受けている人物に負っているのです。いかにひとが文書を発掘しようとも、発掘するという仕種は絶えずやり直さねばなりません。そして発掘された文書も、いつか新たに地中に埋められるであろうことも確信しておきましょう。

——異端は、一般的に、カトリックのドグマがそこを出発点として構成される、迫もちの支点となっています。また異端がなければカトリックのドグマは練り上げられないでしょう。ドグマは大抵の場合二つの矛盾する原理のあいだにあります。この観点から見ると、グノーシスの立場はこれとは違った風に作用しています。むしろカトリックの

裏側あるいは消失点のようなものとして作用しています。この点についてどうお考えですか？

Ph. ソレルス : 「キリスト教」(わたしはこの用語が正当だと思わないのですが)と呼ばれているものの始まりは、とても大きな不透明性に取り巻かれています。そこにわれわれは3世紀もの異様に暗い時代を有しています。そこから奇矯なテーゼ、風変わりなセクト、あり得ないようなグループの大騒ぎが浮び出てきます。ここから325年のニケーアの公会議に至るまでに多くの騒擾があります。この動揺を通して、*何かが起こったのだ*、と信じましょう。あなたもおっしゃるかもしれませんが、時間に何かが到来したのです。もっと深く掘り下げましょう——時間の繊維がその影響を蒙ったのです。ここだけの話ですが、グノーシスはナグ・ハマディ文書から生じているのではありません。それはもっと遠くから来ているのです。グノーシスは、みずから望む場所で、望む時に息を吹きかけてきます。「グノーシス」という語はギリシア語で知識を意味します。つまり救済に関わる知恵が問題なのです。この知恵はイエスという名を持ち得る事件と結びついています。神は具肉化した、神は死んだ、神は蘇った。この3つの結び目をつかんでおく必要があります。準備を整えておいて下さい。

具肉は「言葉」と関わります。始まりに「御言葉」がある。このヨハネの句を決して半過去形にしないことです。つねに現在形にすること。正典外の福音書が「イエスは言った」と記すとき、同時にそれを現在形で聞かなければなりません。これは瞬時に生じることです。もしそうでないなら、この陳述には何の意味もなくなります。「イエスは言った」、違います、「イエスは言う」です。もしひとがこの事柄に過去形を導入してしまうと、ひとはすぐさま映画のなかに投影されてしまいます。実は、映画は、映画の歴史よりもはるか以前に生じているのです。しかし映画が存在するや否や、われわれは福音の外に出てしまいます。良き知らせとは「御言葉」は死を横切りそれに打ち勝つということを認識することにあるのです。福音はこの知らせ以外の基盤を持ちません。

正典となっている4福音書は、外典と言われている無数の福音書に付き添われています。この後者についてはほとんど知られていません。しかしこんにちでは正典のほうもよく知られていないという考えを頭のなかに入れておかなければなりません。毎日そのことを検証することができます。これらの問題に関する無知が重くのしかかっています。ひとつの物語が語られる、それはさまざまな表現や気のきいた言い回しのかたちをとる、するとついにその物語に関しては、もはや何も知られていないことになるのです。誰でもいいですからこのことを実験してご覧下さい。福音はわれわれの参照項から消えています。ニヒリストのヒューマノイドは、かれを石のように硬くさせる敬虔な朗読においすら、福音の鍵を失くしてしまったようです。

正典の福音書と、グノーシス派に帰されている外典の福音書のあいだに対立はあるでしょうか？ わたしはそう思いません。正典の福音書の各行はグノーシスに満ち溢れています。外典の方はというと、それらは福音を最大限に濃縮しそのエキスをから出発して福音を広げています。

リヨンのエイレナイオスはグノーシスを異端とみなしません。かれは間違っています。異端であるには、ドグマに反するものに依拠する必要があります。グノーシスがさまざまな団体を集め、ひとつの「教会」を打ち建てるときは、それは異端となります。それがマニの陥る欠点です。グノーシスは福音の消失点である、その裏側である、お望みならそれでもいいでしょう。しかしなんととってもグノーシスは福音へのアクセス・ポイントなのです。カトリック教会は、ありうる団体としてのグノーシスと対立しますが、その本質とは抵触していません。

福音は時間に途方もない揺れ動きを生じさせました。そのことを解明するのに2000年で十分だとは確かなことはありません。われわれはおそらくそのような理解の始まりにしかないのです。ここで問題となっている神は、『出エジプト記』第3章にある「わたしはわたしが在るところのものである」ehyeh asher ehyehを凝縮しながら、自分がなにものであるかを名乗っています。神はみずからを「わたしは在る」と呼ばせています。グノーシス派のひとつも別のことを言っているわけではありません。かれは言います、「わたしは在る」、と。間違っているのは、それを大々的に触れ回ることでしょう。グノーシスは福音へのアクセス・ポイントです。それは福音のもっとも秘められた領域に通じています。秘められたものを取り除いてごらんさない、もはやグノーシスはありません。同様に救済もなくなります。

おのおのの福音記者はひとつの問いを体現しています。たとえばフィリポは、どこに「父」がいるのかと問います。イエスは彼に答えます、おまえはわたしを見ている、だからおまえは同じく「父」を見ているのだ、と。この問いは素晴らしい、答えも見事です。それぞれの弟子にはその弟子固有の言語の才があります。グノーシス派のひとつとは福音の物語の鍵となるあらゆる点を再び取り上げています。そして目覚めに戻っていくためにそれらの点を機能させています。正典が言明するものとグノーシスがあなたにささやく知識のあいだにはいかなる矛盾もありません。もしあなたが矛盾があると仮定するならば、あなたはいわゆる「グノーシス的なもの」と不当に称されているあらゆる類の迷論に落ち込む危険があります。「アイオーン」についてのおしゃべりや、宇宙論についての話ならいやというほどあります。しかし真のグノーシスは、ひとつの呼びかけにたいして、それによって自分が根底的に変化させられるまでに、答えることに存するのです。それは一瞬の閃光のうちに起こります。あなたはあなた自身の復活にぞっと慄きます。

カトリック教会がこの時間革命における唯一の権威であ

り続けています。アリウスからルターまで、異端者たちはカトリック教会に異議を唱えようと専心します。ほとんど2000年にもわたるドグマに関するアーカイヴは、著しい発明の才によって出来ています。このアーカイヴは真の戦争を反映しています。そのなかでも権威の問題が要石です。この件ではあなたとわたしのあいだで持ちこたえることができるような権威は、使徒伝来の、ローマの、カトリック教会しかありません。その歴史は、パスカルが主張しているように、「真理の歴史」と呼ばれるべきかもしれません。これこそまさに哲学者や大学教授たちには耐え難い主張です。この主題に関して必要欠くべからざる著者がいるとすれば、それはジョゼフ・ド・メーストルです。かれの著書『法王について』は、かれが「哲学主義」le philosophismeと名付けているものに抗するためのもっとも奇想天外な戦争機械です。われわれはここで「歴史」の明確な一地点にいます。つまりフランス革命と、それとともに近代が勝ち誇る地点です。この勝利にたいしてグノーシス派的なメーストルは、ローマというカードを切ることによってその背後から攻撃を仕掛けます。

ここでわたしに、グノーシスにおいてと同様に「教会」にとっても決定的な、才気煥発なひとりの人物に賛辞を呈するのを許していただきたい。わたしが話したいのは「悪魔」殿です。かれは福音の中心部分で卓越した場を占めています。福音の公式ヴァージョンでは、砂漠でかれがいかにかイエスを誘惑するかが見られます。かれに感謝することと引き換えに世界の支配がイエスに申し出されているのが認められます。しかも聖書のテキストは悪魔を「この世界の君主」であると同時に「虚偽の父」であると定義しています。ひとりの首尾一貫したグノーシス派ならこのことから次のように推論するでしょう。世界そのものはサタンに属している、これまでもずっと属してきたし、これからもずっと属するだろう、と。「メシア」が告げる「王国」は、福音書が絶えずそう断言しているように、この世界のものではありません。グノーシス派のひとつとは考えます、宇宙は、その全体において、また社会も同様に、「悪しきもの」le Mauvaisにならって秩序立てられている、と。かれらはいたる所に摘出することの不可能な生来的な悪意を識別します。おやおや。そしてもし、この世界が神の創造ではなくむしろ悪魔の創造だったとしたら？ グノーシス事件はこのことの周囲を回っています。そこから、『創世記』の、より暗い、別のヴァージョンが生まれます。そこではサタンはもはや端役を演じません。グノーシスは「宇宙的ではない」acosmiqueという事実をいくら強調しても十分すぎることはないでしょう。救済は内部から来るのです、決して宇宙からではありません。

悪魔は、その虚偽との父子関係からも分かるように、「父」に反逆する存在です。かれはそのうえ「そもその始まりから人殺し」です。グノーシスの読解では、従って、天地創造は人殺しの様相を含んでいるのです。デモンたちの君

主は「闇黒」のうえに君臨しています。人間の行動も、受胎するや否や、その性質を分かち持ちます。それでもひとがこれほどまで悪魔を忘却しているのはやはり奇妙なことです。悪魔と復活という二つの点に、こんにちでは消印が押されているのです。この二つについて、近代の人間、すなわち奴隸的存在は、語られるのをもう聞きたがらないのです。それももつともなことです。というのも一方がなければ他方もない道理ですから。悪魔を取り去ってごらん下さい、あなたにはもう復活もありません。この不在は悪魔の利益に適っていることをついでに注目しておいてください。

——アイロニーが無いわけではありませんが、あなたはしばしばローマ・カトリックという厳密な立場を断言なさることがあります。しかしながら、よく聴くものにとっては、ここかしこであなたのうちにグノーシス的な調性があらわれ始めているのが感じられます。いかにしてこれが加わっているのでしょうか？ どのような意味において『楽園』はグノーシス的な書物であると説明することができるのでしょうか？

Ph. ソレルス : わたしがカトリックの立場をとっている？ その通りです。わたしの書くもののうちにあなたのおっしゃるような「グノーシス的な調性」を見分けることができる？ 親愛なる友よ、調性ではありません、基礎となる音です。いかなる矛盾もなくわたしはカトリックであると同時にグノーシス派です。他方ゆえに一方あり、です。グノーシスとわたしの関係は40年以上も前に遡ります。わたしはその日付けを、1965年に出版された『ドラマ』というわたしの1冊の本によって記しておきます。この本のなかで、わたしがダンテというグノーシスの巨人に真剣に興味をいだき始めているのが見られます。かれもまたカトリックでありグノーシス派です。これも他方ゆえに一方あり、です。わたしの観点からすると、グノーシスとカトリック性を分離することはできません。しかもそのような分離は悪魔ディアボロスの特別な徴そのものです。ローマ、それは万人のルサンチマンの対象となる唯一のものです。「ローマに敵対するすべてのひとはローマの友である」と、ジョゼフ・ド・メーストルは言います。この敵意の団結のうちに、名付け得ない性的な背景があることを狩り出すことができなければなりません。悪魔憑きたちの激昂、これを、そのような敵意を始動させるものについての直接の情報として取り上げましょう。「言葉」「時間」そして「復活」を結びつなぐこと。これこそがひとを頑なにさせるのです。この結びつきがマリアという名と関係があることは、あなたを驚かせないでしょう。サンドリック・ル・マゲールは、そのとても美しい本『乙女としてのイスラエルの肖像』のなかで、聖処女を聖書の伝統のなかに再統合させていますが、それももつともなことです。しかしこれは物事の一面でしかあり

ません。マリアという名はそれ自体が革命であり、福音のうちでもっとも内密な結びつきをあらわしています。フランス大革命は、パリのノートル・ダム寺院の祭壇における「理性の女神」とともに、その本質において、マリアの悪魔的な反転だったのです。この点に関してはメーストルが先駆者です。かれは最初にこれを見たのです。

『楽園』はグノーシス的な作品です。第1巻よりも第2巻のほうが明らかにそうです。そこにおいてわたしはフランス語に可能なユダヤ的またカトリック的なカバラを繰り広げています。わたしの考える流儀は単純です。わたしは単独性から出発する、わたしは統一性へ向かう、そしてこれらすべてが思考可能なのは普遍性においてでしかありません。ここでわたしはあらゆる「文化的多様性」に対して正反対の主張をします。多様なものはわたしの関心を引きません。ただ一体性のみが重要です。ひとりの個人が、ユダヤの出であろうとギリシアの出であろうと、中国人であろうとピグミー人であろうと、金持ちであろうと貧乏であろうと、そんなことはどうでもいいのです。ただその個人がカトリックであり、そのことゆえに普遍的になるだけで十分なのです。統一性へと向かっており、多様なものに向かつていないこと。

グノーシス派はかれの単独性を凍りつかせる呼びかけに答えます。これは唯一の集団的権威の必要性和対立するわけではありません。わたしは『法王について』の冒頭の銘句のことを思います。それは『イリアス』からとられたもので、翻訳するとこうなるでしょう、「ただ一人しかいないということにしなければならぬ」。一言で言うと「法王」が必要である、ということです。ええ？ ええ？ まあ、そうです！ このようになっているのです！ ただひとりの人間だけが権威を持つということです。2000年前から使徒の使命が継承され続けている。これこそ前代未聞の小説です。ヨハネ＝パウロ2世の暗殺の試みを、わたしは耐え難い悪趣味の行為だと感じました。あなたもご存知のとおり、スタンダールも言っています、「悪趣味は犯罪に通じる」、と。

ここだけの話ですが、ローマはわたしにとってもっとも大きな庇護の場です。グノーシス派の人間として、わたしは「法王」の庇護のもとにわが身をおきます。わたしはいかなる人物にも信頼を持っていません。たとえ世の中すべてのひとびとがわたしを批判しようとも、サン・ピエトロ（聖ペテロ）は、いつまでもわたしに隠れ家を与えてくれるでしょう。わたしの敵の家以上に、わたしをもっと安全でいられるような場所はどこだというのです？ わたしは使徒伝来のローマのカトリックしか信じていません。それはわたしの唯一の避難所です。それゆえわたしは『神曲』についてのわたしの本をヨハネ＝パウロ2世に捧げたのです。

ペテロとは誰でしょう？ そう、それは羊の群れの番人です。歴代の法王たちは羊の群れの番人なのです。ひとは羊の群れを批判すべきでしょうか？ 撥ねつけるべきで

しょうか？ とんでもない。羊の群れは必要です。20世紀になってひとびとは羊の群れを変えようとしてきました。階級や人種といった名のもとに、羊たちを作り直そうと努めました。なんという誤り！ わたしは、ほんとうに単純でまったく愚かな羊の群れ——ペテロの後継者に導かれるままになる羊の群れの味方です。スターリンの妄想も、ヒトラーのそれも、結局われわれを犯罪に連れ戻すことにしか行き着かないのです。「法王」はこの世では「復活された方」を代理象徴します。法王以上に、他の誰が羊の群れの世話をみるのでしょうか？ わたしはこれ以上にすぐれた候補を見ません。ローマのサン・ピエトロのバルコニーで、「法王」は、キリスト（それは同じく「言葉」でもあります）は復活した、とあらゆる言語で告げます。かれはそれを復活祭のときに、ミナコトセカイニ *urbi et orbi* 表明します。このメッセージはあらゆるテレビによって再放送されますが、これはもうだれも信じていない見世物ですし、なんの重要性もありません。それでも「復活」という語は、地球上のあらゆる言語になって、自分自身のうえをぐるぐる回転しています。カトリックの普遍性は、この復活の旋回以外の別の意味を持ちません。

羊の群れのは 2000 年前から「法王」に従うべくそこにいます。このことが誰を不快にさせるのでしょうか？ わたしとしてはこのことに文句をつけようもありません。この点でわたしは「近代」と呼ばれているものとは深く無縁です。

——グノーシスは信仰や宗教である以上に、われわれを救済する知恵として姿を現します。それは「真理」のうちにみずからを取り戻すことを教え、人々が通常認めている世界をはみ出す「別の」、「新たな」、「奇妙な」と定義される世界を結集することを教えます。「この世界の指導者は血を愛する」とペラテス派のひとりのグノーシスが（『横切るひとびと』）主張しています。「わたしは殺戮者たちの列の外に跳躍するために書いている」とカフカは言います。文学もまた、罪の最中における無垢の知恵を前提としていないのでしょうか？

Ph. ソレルス： マニ教、これはグノーシスのとても深いひとつの分派とみなし得るものですが、そこにおいては「光」と「闇黒」の出来事についての物語があります。マニ教徒は3つの時間を区別します。最初の時間において「光」は「闇黒」から隔たっております。しかし後者は、貪欲から、ついにはその王国を侵略します。そこから結果として生じるのは、混淆という破局的な時代です。われわれはそこからなんとか抜け出ようと骨を折っています。将来の希望は新たな分離です。それは、「闇黒」が「光」を閉じ込めた物質的な夾雑物から「光」は解放されるだろう、というのです。「光」と「闇黒」のあいだに仮借ない軋轢があります。「大いなる戦争」です。これをランボーは「精神の闘い」と名付けています。

混淆の外へ出ることで、これが目標となります。このことと関連してグノーシス派は通常3つのタイプの身体を区別します。もっとも数多いのは「ヒューレー的な身体」（ヒューレーすなわち物質に由来します）です。完全に物質的な身体によって規定されているものです。みずからのうちに閉じ込められ、さまざまな制約によって限界づけられています。次にあるのは「プシケー的な身体」です。われわれはその侵入を受けてます。「プシケー的な身体」は自分が思考と関わっているとイメージしていますが、じつはその構造がたえず思考にたいする障害となっているのです。「プシケー的な身体」は自分が「ヒューレー的な身体」の上位にいると信じています。その思い上がりは甚だしいと同時に虚しいものです。一般的に「プシケー的な身体」は非常に苦しみます。最後に「プヌーマ的な身体」（プヌーマすなわち息吹、精神、に由来します）があります。これは他の二つのグループから激しく憎まれ迫害されています。混淆の外に出られるのは、ただこの「プヌーマ的な身体」のみです。「プヌーマ的な身体」はこのグループの各員に個別に向けられる呼びかけを耳にしたのです。

グノーシス派のひとびとは宇宙を巨大な葉棚のようなものとして思い描きます。光の破片を集め、それを混淆という鳥もちで捕われている状態から引き出してやるのが重要なのです。しかし救済はいかなる共同体も前提としません。グノーシスにおいては単独の冒険しか存在しないのです。それらの冒険は、そのようなものとして、世界の隠された歴史にインパクトを有しています。あるいはこう言ったほうがよいかもしれません。「自然」はとても美しい、しかし「人間」が「自然」と調和しているのは稀である（偉大な芸術はその本質からいってグノーシス的なのです）、と。

どんなグノーシス派も時間を通じてその先駆者たちを認めます。ある意味でそれぞれの単独的存在は、すでに何度も、別の名前のもとで、別の状況で、別の言語のなかで起こっているのです。それにプルーストも、時間を通じて存在するのはたったひとりの真の作家だけであり、その生涯はさまざまな固有名詞に応じて変化しているだけである、と考えていました。

ここで「文学」という語にしがみつくと必要はありません。「芸術」という語すら警戒すべきものとなります。こんにちではこれらの語はあまりの貧困と混乱を包含しているので、それらを維持するのは困難です。唯一重要なこと、それは手つかずのものに戻ること、つまり永遠の断罪から抜け出すことです。この領野において経験は個人的なものでしかあり得ません。規則などありません。グノーシス派でありながら自分の人生について何も書かないというのも十分あり得ます。カトリック教会は、とメーストルは言いました、それについて書かれる必要のないものである、たとえ多くのことを書かせてきたにせよ、と。ひとがひとつの

魂と身体とに真理を所有するとき、どうしてページにページを付け加える必要があるでしょう？ そうは言っても、そうすることもできます。

文学におけるビッグ・ネームたちは救済しか求めていません。パスカルやサン・シモンにあなたがたは文学をなさっていらっやいますねとあなたが言ったとしたら、かれらは激しく抗議したことでしょ。かれらは虚偽の外に跳躍する、一言で言えばねかるみの外に出ることしか求めていませんでした。たとえば、サン・シモンは歴史を「聖霊」の光に照らして書きましたが、それはその歴史を、罪深い汚物どもの行列として出現させるためだったのです。かれはそれに成功しており、それは並外れています。

——グノーシス派のひとびとは断言します、われわれは悪と重さに運命づけられている世界に「投げ出されて」おり、この世界ではわれわれは「異邦人」であろう、と。かれらは肉体的に子をもうけることにたいして、死が宿命づけられたものであると懐疑の目を向けます。そして息吹と言葉に結びついた別のかたちの誕生の必要性を公準としてかけます。それはひとつの存在が実質的に生き始めるためなのです。さらに『テオドトスの抜粋』(80年)の第1章(アンリ＝シャルル・ピュエックによって引用されています)に次のような文が見い出されます。「母が生む落とすものはこの世界のなかで死へ連れていかれる」。あなたの小説『女たち』を、あの挑発的な前書き、すなわち「世界は女たちに属している。すなわち死に。この点についてみな嘘を言っている」で始めることによって、あなたはグノーシス的な言表を生産しているのだという意識をお持ちだったでしょうか？

不滅の言葉の具肉化としてのキリストについては、かれは在った、かれは在る、かれは在るだろう、と言い得るでしょう。しかしグノーシス派のひとびとは、この様式を、みずからのうちで始まりと終わりとの交差した精神的存在、すなわち真のグノーシス派の人間すべてに適用します。あなたもご自身に関してこの異端の立場を再びお取りになるのでしょうか？ おのおの「弟子」をキリストの分身、または双子(アルメニア語で「トマ」、ここから使徒トマスの他の使徒たちにたいする特権が生まれる?)とすることは筋の通ったことでしょうか？

グノーシス派のひとびとは「死」から「生」へ移行することを教えます。つまり復活のもっとも生き生きした点と一致することを教えます。それは無知という厚い角膜痕を引き裂くことによってです。「おのれのすぐそば」にあるものと、「カイロス」すなわち適した時に、再び一緒になる必要があります。かれらは言います、「王国」はおのおのの瞬間にある。しかしさらに自分自身をその「王国」に開かねばなりません。この「王国」はおのおのの孤独と共存することを止めませんが、しかし孤独のほうは一瞬の閃光のうちにそれをつかむことができないので、無気力状態から

決して抜け出さないのです。地球の全表面でニヒリズムが蔓延している今、眠った状態で自分にたいしてヒステリーをおこし、いびきをかきながら動揺しているようなひとびとに、われわれは取り囲まれていないでしょうか？ この不毛な小刻みな震えは目覚めの正反対ではないでしょうか？

イエスの位置する不可能な場は、かれが弟子を召喚する場です。そこからイエスは来たのであり、そこへかれは戻ります。いかなる場であれ、持続のいかなる点であれ、この「生の場」と再び一緒になることができます。いかにして、そこからわれわれを隔ててしまった遮蔽幕を突き抜け、その場に飛び込めばいいのでしょうか？ 『トマスによる福音書』の「イエスの言葉」5は言っています、「おまえの顔の前にあるものを知れ、そうすれば隠されているもののヴェールがおまえにたいして取り除かれるだろう。というのも出現することがないように隠されたものは存在しないからだ」。各瞬間にわれわれの前にあるもの——もっとも近くにあり、もっとも直接的なもの——を知ることによって、ひとは「王国」に到達することができるのではないのでしょうか？

Ph. ソレルス : あなたの前ですが、羊の群れを褒め称えたいと思います。それは、生殖に反対してわたしがなしたこれまでの言明と釣り合いをとるためです。生殖は根本的な誤りです。もちろん。しかしそれをひきつることなしに言うすべを心得なければなりません。生殖が詐欺であることに何の疑いもありません。しかしその正体を憎悪なしに暴かなければなりません。節制するほうがずっとましでしょう。だからといって禁欲主義に陥ることは無しです。禁欲者の立場になると多くの否定的な幻覚が生まれます。わたしが強く勧めるものは、セックスの無神論といったものによく似ています。つねに淫欲はあるし、あるだろう。それに結局それはそれほどたいしたことではないのです。性生活から羊の群れは生じるのです。われわれは船に乗り込みましたが、カトリック教会のおかげで洗礼とともに第二の誕生もあるのです。羊の群れはそのことがまったく分かりません。しかしメーストルも言ったように、不十分に理解するよりは何も理解しない方がましなのです。あらゆる異端は、ゆがんだ、あるいは不完全な理解から、その基盤を引き出しています。

ユダヤの聖書には多くのグノーシスがあります。それに満ち溢れているとさえ主張し得るでしょう。しかし同時に「律法」もあります。ところでグノーシス派のひとびとの悦ばしき知恵は「律法」を非常に節約するのです。ニーチェの美しい表現を繰り返せば、知るものは「法の外にいる君主」なのです。

グノーシスが深くエリート主義的であることをわたしは否定しません。たとえば『トマスによる福音書』の「イエスの言葉」23はこう断言しています、「わたしは千人のうち

一人を、一万人のうち二人を選ぶだろう。かれらは、ただ一人きりでありつつも、たがいに支え合うだろう。つまり統一性が強調されています。ピュエックが示しているように、「ただ一人きり」 *un seul* という表現はモナコイ *monakhoi* という語を翻訳しています。「モナコイ」とは、「ひとりの」、「孤独な」、「孤立した」、「独身の」、「節度のある」、「唯一の」、「自分自身と統一性へ立ち戻った」、などを同時に意味する用語です。あなたも検証することができますが、「法王」の言う言葉に対して程度の差こそあれオートマティックな苛立ちを表明するような人物はみな、そのことによって、いかにほとんど統一化されていないかを証しています。つまりかれは分断されており、滅びたいという意志によってひそかに揺すぶられているのです。神経の障害は、ときどきヒキガエルを嘔き出すにいたることもあります。大いなる分断者」の存在を証しているのです。統一性の不在はドラマティックな結末を迎えることもあり、ときには自殺にまでいきます。ああ、自殺者たち！かれらは社会に自分らのようなひとびとを作り直させます。社会はかれらを分断された状態に割り振るのです。悪魔憑きのひとびとを暴れさせるまた別のことがあります。それはカトリックのミサです。まず初めに実体変化、すなわち秘跡の言葉に続く、パンとワインのキリストの身体と血への変化があります。分断された存在を怒りで気も狂わんばかりにするのに、これに比すべきものは何もありません。ヴァシリー・グロスマンの『システィーナの Madonna』（かれはドレスデンでこれに見とれたのでした）について書いたものを、あなたはお読みになりましたか？ その当時かれはまだスターリン執行部からよく見られています。かれは監視され、検閲されますが、しかし抑圧されてはいません。にもかかわらずかれがラファエロの絵について述べたことはイデオログのスースロフの神経を逆撫でします。スースロフは、何年も後に、ヨハネ＝パウロ 2 世にたいする暴行の監督者となるような人物です。スースロフはクレムリンにグロスマンを呼び出し、かれにたいして怒りをあらわにします。グロスマンのカトリシズムにたいする寛大さを非難します。われわれは 1950 年代の初頭にいます。何百万人もの死者のちに。それから忘れないようにしましょう、ピウス 12 世に反するキャンペーンの始まりはフルシチョフからであることを。

——グノーシス派のひとびとにとって、ひとは「この世ですぐに」復活するものです。しかしもしこの復活が「即座に」われわれを変えないなら、またそれが生を神性さのうちに回復させるものでもないなら、どのようにしてそのような復活は死に対して優位に立つのでしょうか？ ナグ・ハマディ文書のひとつ『復活に関する教義』にこんなことが読めます。「復活とは何か？ それは、あらゆる瞬間における、復活したひとびとについての啓示である」。あるいは「世界は復活であるよりむしろ幻影である」。あるいは

また「さまざまな区分と絆から自由になれ。そのときおまえはすでに復活を所有している！」。このような復活は「新しいものへの変貌」とは別物ではないでしょう。時間の内部そのものでの死に対する勝利という、グノーシスのこの特殊性をどう考察なさいますか？

Ph. ソレルス : あなたはおっしゃいます、グノーシス派は時間の内部そのもので死に対する勝利を求めている、と。これこそまさにわたしがしていることです。ロラン・バルトも『作家ソレルス』においてそのことを理解するのに同意しました。あそこでかれは、『ドラマ』において賭けられているものは「きわめて長く、きわめて短い複合的な時間」である「目覚め」のようなものであると述べています。「それは生まれつつある目覚めであり」、とかれは言います、「目覚めであるがその誕生は持続するものである」。第二の誕生としての復活についての知恵は、絶え間なく与えられ、繰り返し与えられるのです。この知恵は決して獲得されません。まさしくこれを「持続する誕生」と定義することができます。ひとがわれわれに押し付ける時間はわたしの言う時間ではありません。ここに気のきいた警句を見ないでください。そうではなくわたしの生活の危険線なのです。わたしは他の時間を持ったことが一度もありません。これはわたしの場合ですが、これは社会という「太った動物」にとって償いようもない罪であり続けることでしょう。

——グノーシス派のひとびとは「言葉」を褒め讃えます。言葉はまた「知恵」です。言葉に擬人法で語らせているほどです。それはナグ・ハマディ文書の別のひとつ『雷、全きヌース』と呼ばれるものにおいてです。言葉は言います、「わたしこそは、婚約した女であり婚約した男だ / わたしこそは、わたしを生んだわたしの夫だ / わたしこそは、わが父の母であり、わが夫の姉妹である / かれこそは、わたしの後裔である」。あるいは「わたしこそは声である、その音は数しれない / そして言葉である、その様相は多種多様である / わたしこそは、わが名の表明である」。あるいはまた「わたしこそは、ひとの捉えることのできぬ沈黙である」。さらにまた「わたしこそは、だれにでも受け入れられる聴覚である / そして同時に捉えられ得ない言葉である」。このようにみずからを告げる言葉は、ハイデガーが後年「語る言葉」と名付けるであろうものに似ていないでしょうか？

Ph. ソレルス : 「言葉を言葉として言葉へもたらす」というハイデガーの命題は、明らかにグノーシスと響き合っています。時間と言葉のあいだでの恍惚的な絡み合い、これがここで問題となっている体験です。復活の時間は、あなたが言語と再び落ち合っていることを前提とします。このことはいかなる意志も動員しません。むしろ言葉の呼びかけに答えることが重要なのです。ここにマニ教徒の語る

「救済された救済者」が再び認められます。そのテキストは言います、「わたしは永遠の夜のなかでの目覚めの声だ」と。このとき、あなたは答えるか、否かです。そういうケースでない時もあります。わたしはよくそれを間違えて自分を責めます。本質的なことは、言葉のなかで呼びかけているものに耳を傾けることに存します。それから、一挙に、みずからの名において、答えること。つねにこれほど困難な高みにいることは不可能ですが、このような高みに通じる道のうえに留まることはできます。

ハイデガーがグノーシス派？ もちろんそうです。これが哲学の聖職者たちにとって躓きの点です。かれらがハイデガーに贖わせているものは、かれがグノーシス派でありまたカトリックであったということです。でも、しっ、黙って！ ハイデガー研究者たちですらそれほど詳しく知りたいたいと思っていないのですから。

——『雷、全きヌース』のなかのつぎのような言葉の奇妙な巧みさをあなたはどう理解なさるでしょうか。「何故、わたしを憎むあなたが / わたしを愛するのですか？ / そしてわたしを愛するひとびとを憎むのですか？」。そして言葉が「わたしは神のないひとつの言葉である / わたしこそは言葉であり、その言葉の神々は数かぎりない」と言うとき、それはいまだ後退しており、おそらく発見すべきものとして留まっている、神的なもの次元にむけて、合図を送っているのではないですか？

Ph. ソレルス : わたしはもうひとり別のグノーシス派を知っています。かれにたいしてわたしは強い愛情を持っていました。わたしが話題にしているのはラカンです。かれは毎日「ブシケ的な身体」どもが持ち得るうんざりすることと格闘していました。かれらがうんざりする人間であるのは絶対確実です！ グノーシス派のヴァレンティノスのように、ラカンは「父の名」についてよく語っていました。冗談で「憎悪愛」*hainamoration* について話すこともありましたが。これはナグ・ハマディ文書の『雷、全きヌース』が伝えている次の問いに呼応しています。「何故、わたしを憎むあなたが / わたしを愛するのですか？ / そしてわたしを愛するひとびとを憎むのですか？」。何故でしょう？ まったく単純です。何故なら言葉があまりにも愛されているので、この愛に耐えるには、言葉を憎む以外なしようがないからです。キリストも自分のことをこう言っています、「かれらはいわれなくわたしを憎んだ」。このような憎悪に何故はありません、何故ならそれは愛の逆転したものののですから。

そうです、イエスは憎悪を吹き込みました！ 特にかれがこう言ったときです、「アブラハムが在った以前から、わたしは在る」。これは生物学的な「律法」博士たちを逆上させました。こんにちでは、キリストの言葉にあるスキャンダラスなものは消し去られる傾向にあります。間違ってい

ます。福音とは、ラビ的なユダヤ教にたいする挑発、冒瀆でしかないし、そうでしかあり得ません。これは重大な結果を招きます。イエスを石打ちの刑に処すため、殺すために、ひとはかれを探し出し、ローマ人にかれの死刑を要求し、ついに十字架刑の許可を得ます。「民衆が決定する」ことに関する愚かな言動を繰り返す必要はありません。しかしパリサイ派のひとびとの立場とイエスの立場のあいだには真の断絶があります。その断絶を隠すべきではないし、それを恥じるべきでもありません。このことについてなし得る最善は、この断絶をその偉大さにおいて復元することです。

グノーシスは反ユダヤ教的であると非難されました。誇張されてます、マルキオンは例外ですが。しかし結局、宇宙的ではない「光の父」は、『創世記』の造物主とは何の関係もないのです。ロートレアモン(かれもまた偉大なグノーシス派ですが)のような人物ならば、「言葉」を吹き込む光の神は、気違いじみて犯罪的なこのやっつけ仕事、すなわち天地創造をしでかした神とは違うことを十分よく理解しています。ロートレアモンもランボーも反キリスト的ではありません。かれら以上にキリスト的であることは実はむしろかしいほどです。これがシュルレアリスムの19世紀的な先入観を混乱させることなどわたしは問題にしません。またこのことがクローデルにおいては支柱となっていることともどうでもいいことです。わたしは深くブルトンとクローデルを評価していますが、かれらのあまりにも狭い宗教的な観点をわたしははみ出しています。

『時間の旅人たち』のなかでわたしはブルトンとクローデルを、ヴァトーを仲介させて和解させています。二人ともあの素晴らしい絵『無関心』が好きなのです。一方にとってこの絵は「真珠母のメッセージ」であり、他方にとっては「真珠」です。このスペルマ的なメタファーを通して、無意識のうちに和解が成立しているのです。

——ヴァレンティノス派のテキストのひとつ『真理の福音』では、「良き知らせ」は「喜ばしい」ものであり、ただ選ばれたものだけに割り当てられたものです。「父」を知るというのは、言葉自身が精神的な働きを開始させながら、「言葉の力」を通してのみ可能なことなのでしょう。従って「救済者」は言葉と「ひとつ」になるのだと思われます。ジェームズ・ジョイスならこう言うでしょう、「言葉よ、われわれを救え」*Word, save us*。誰が、こんにち、これを真面目に受け取るでしょうか？ 両肩をそびやかさない程度に、言語にたいして十分な信頼を誰が持っているのでしょうか？

Ph. ソレルス : ひとは宗教を信じなければ信じないほど、それだけますます権威の原則を認めるようになります。使徒の継承は、その権威の受託者となっています。なにしろ羊の群れがいるのですから、かれらを虐殺してしまうよりは、「法王」がいる方がずっといいのです。ニヒリズムが

存在するや否や、「父」に関連して面倒なことが生じます。というのもひとは「父」のようなものとしてあるべき「息子」ではないからです。このような面倒が集団的犯罪に通じているというのは、20世紀が証明しています。「意識的に子をもうけること、そういうものとしての父性は、人間にとって存在しない。父性とはひとりの生み出すものからひとりの産み落とされたものへの、神秘的な状態であり、使徒的な伝達である」と、ジェームズ・ジョイスは書いています。かれが言っている「言葉よ、われわれを救え！」以上にグノーシス的な表現が存在するでしょうか？

——『真理の福音』は、「父にたいする無知」を「悪天候と不安」に通じる「さまよい」と同一化しています。そのテキストは言います、「それから、悪天候が、霧のように、誰も見るができないほど凝り固まった。この事実から、「過ち」はその力を引き出した。「過ち」は真理について無知なので、それ固有の流儀で空虚のなかで活動し始めた」。もしこのような歴史が、混乱の凝固によってみずからを支えつつ、一方で見ることも聞くことも可能な言葉によって貫かれることしか求めていないとしたら、どうでしょう？ またもし、この世という悪天候の世界が無意味のなかに崩れ去るとしたら？ そのためにはテキストが「理解できぬ把握できぬもの」Inapprehensible inconceivable と名付けているものが萌芽するだけで十分ではないでしょうか？

そうすれば、グノーシスの言い回しに従うと、「発見において喜びへと誕生する」ことが可能ではないでしょうか？

Ph. ソレルス : 「悦ばしき知恵」としてのグノーシスは「喜びとしてのわたし」が開花することを可能にします。ぬかるみから抜け出す幸福。悪魔ディアボロスにわが身をむさぼらせているひとびとにとってはお生憎様です。「誤謬は苦痛に満ちた伝説である」、とロートレアモンは言っています。人間は書物のなかで不幸を創造すべきでないとも付け加えています。人間にできることは、不幸に関する道徳的な記述を示すためただ不幸を描写することだけです。モラリストの手にペンを授けてごらんさい、かれはあらゆる詩人に優るでしょう。これはなにも教訓をたれるということを意味しません。そうではなく議論の余地ない格言に到達することを意味します。「理解できぬ把握できぬもの」？ 違います。わたしはグノーシス的な救済において到来するものを完璧に把握し理解します。この知識こそが喜びを生じさせるのです。知恵はみずから楽しむのです。

——グノーシス派のひとびとは「忘却」と「嘘のねつ造」の支配を告発しています。たとえこの支配がこの世界を完全に牛耳っているとしても、かれらはいかなるときであれそれに打ち勝つことができると考えています。あなたも同じ意見ですか？ もしそうなら、どんな条件においてでしょう？ グノーシス派のひとびとのように、この世界

は隅から隅まで贗造されている——そしてギ・ドゥボールの表現に倣って言うと、今現在の「統合された見世物的」時代においてはかつてない以上にそうなのですが——と認めつつも、ひとはまだ贗造以外の別のものに行き着くことができるのでしょうか？

Ph. ソレルス : グノーシス派のひとびとはこの世界に打ち勝とうとはしていません。かれらはただ救済を追求しているだけです。世界は「悪しきもの」の取り分となっているままです。世界が贗造されていてもどうでもいいことです。重要なのは劫罰と救済のあいだでの戦争です。ドゥボールですか、儀礼的な賛辞ならかれに捧げられるでしょう。しかしかれは社会的なものに囚われたままです。社会的なものがあまりにも多すぎると、時間の自由な次元が阻害されます。かれは自分の単独性から出発して、まったくグノーシス的な孤独のなかで語っています。想像の共同体の名においてみずからを表明しているのだと主張はしていますけれども。これが共同体の問題です。共同体とはつねに想像のものなのです。だとすれば、もうこれをかぎりに、永久に、共同体を諦めるほうがまだいい。グループもない。団体もない。政党も皆無。「われわれ」の解体。「ひと」をばらばらにすること。いまや社会が神となっていますが、この新しい偶像にたいしては断固とした無神論者であること。晴れ間を、救済を探し求めること。強烈な喜びを、心を奪う幸福を認めること。この点に関してドゥボールはまだその手前に留まっています。自我に関する愚かで痛ましいかれの言葉がそれを証明しています。

グノーシスにとって「ニヒリズム」という語はこんにち起こっていることを描写するのに十分ではありません。この語が、西洋形而上学が技術的な統治として地球上に君臨しているときに、その墮落を指し示していることは何の疑いもありません。しかしわれわれの目の前で繰り広げられている邪悪さは社会的搾取をはるかに上回る結果を招くものです。この点についてはシェリングの方がマルクスよりも貴重であることが判明します。ついでに信心深い偽善すべてに対しては、ヴォルテールの皮肉を忘れないようにしましょう。

グノーシス派は勝者です。かれは、たんに戦争に負けただけでなく、敗北したものの前でも身をかがめません。敗者に敬意を表して追悼することはありません。詩人は呪われていません、ヴェルレーヌの駄弁において以外は。挫折は勝つことを学ぶためのひとつの手段にすぎません。マニ教徒たちが描いている「大いなる戦争」に直面させられたとき、挫折するのは禁じられています。英雄的な戦士が敗北を喫したとき、かれらに敬意を表することはできますが、しかしそれも敗走する魅力に足をからめとられること無しにです。ドゥボールは負けた。じゃあね！

社会的なものは錯覚です。決して賭け金とはなりません。ひとはあれやこれやの実践に加わることもあるでしょう

が、それは戦術でしかありません。社会的なものの中には、尊敬すべきものも、真面目なものすら何もありません。社会的なものの真実は犯罪のなかに横たわっています、そしてそれはグロテスクなものなかに開花します。

——『フィリポによる福音書』に以下のことが読めます、「死者たちの相続者たちはかれら自身死んでいる。かれらが相続するのは死者たちからである。生きているものの相続者たちはかれら自身生きている。かれらは生きているものと死者たちから相続している。死者たちは誰からも相続しない」。この奇妙な言い回しはあなたに何を吹き込みますか？

Ph. ソレルス : 死者たちですか、かれらがみずからを葬り去るにまかせましょう。生きているものとの一体性なのかにいるひとについては、かれが生者たちと死者たちから「相続している」のは当然です。間断なく死者たちを、肉体的な死者たちだけでなく精神的な死者たちを生産している犯罪的なプロセスのことすべてを、かれは知っています。あらゆる大陸での、あらゆる言語での、文明の歴史は、あなたにその情報を与えることしか求めていません。もしあなたが知識を得れば、あなたはこの歴史の隠れた力を所有します。その力はあなたの目に飛び込んでくる。これがあなたを恐れさせることがないように。知恵は救済の手段に関わっています。さまざまな手段のうちで、地獄についての正確な科学があります。みずからを救済するひとは悪のロジックのことも熟知しています。かれにとって死と狂気は感じの良い二人の娘です。

知識を欲しないひとびと、社会的なものという鳥もちに捕われているすべてのひとびとを、たとえかれらが右翼であろうと左翼であろうと、わたしは蒙昧主義者と呼びます。というもかれらは、かれらの知らないうちに「闇黒」に仕えているからです。滑稽なのは、決してかれらはみずから仕えているものが何なのか詳細を知ることはないだろうということです。

——グノーシス派のひとびとは、天地創造をやっつけ仕事であると解釈することによって、世界の「ねつ造」そのものを問題にします。かれらはあらかじめ弁神論を拒絶しているのではないですか？かれらの存在は、さまざまな姿をとって存在している「哲学主義」には受け入れ難いのではないのでしょうか？かれらは、ハイデガーが「存在一神学」と名付けているものの枠組みを爆破させているのではないですか？そしてかれらは、ラビ的なユダヤ教とカトリック教会を同時に拒否しているのではないのでしょうか？

Ph. ソレルス : 「天地創造」については、実際それは誤りです。それは「屍の学校」です。『トマスによる福音書』

が言っている通りです、「世界を知ったものは屍を見出した」。生後7日の赤ちゃんでさえ老人よりそのことをよく承知しています。新生児のほうが知識人より生と光についてよく知っているのです。哲学の悲惨はあまりにもひどいので、哲学は自分をつねり始めているほどです。あの「太陽の快樂主義者」(よく言うよ!) ミシェル・オンフレが、グノーシス的なサドに連結し得るものを読んでごらんください。あなたは哲学の貧困に関して十分な観念を得ることでしょう。すなわち社会的哲学の蒙昧主義です。わけのわからないことを口ごもる下品さを背景とした愚かしいごまかし。言葉が選択の対象としたわけでもない人間が、かれの言語のもっとも偉大な天才のひとりに哀れにも復讐しているのです。このような復讐の見世物は、もっと凶々しいやり方ですとわれわれに押しつけられることでしょう。こんな哲学の下品さはわたしを笑わせます。わたしは哲学の、悲愴というよりはずっと滑稽な、道化的な性格を感じ取ることができます。

グノーシスは「哲学主義」にとっていつまでも受け入れ難いものでしょう。そうは言っても、同一面上にラビ的なユダヤ教とカトリック教会を置いてみるのも、気をそそることです。しかしここではその誘惑に逆らうのがいいでしょう。シンメトリーの効果が容易にわれわれを説得するかもしれませんが、しかしどうしようもないではありませんか、あの恐ろしいグノーシス派のひとびとは最終的にローマ教会を選ぶのです。

かれらはカトリックに投票するのです！おぞましいことですが、甘受するしかありません。カトリック教会、すなわち普遍的な教会は、なんでもかんでもポケットにしまっただけで何の問題もないのです。『聖書』、『コーラン』、ギリシア正教会信者、中国語、サンスクリット語、グノーシス。カトリック教会はこれらの大海原に祝福を注ぎます。これは文化的多様性とは何の関係もありません、こんにち効力を発揮している人道的なプロパガンダにとっては気に入らないことでしょけれど、これは統一性なので、それを「法王」という白鯨が人格化しているのです。

おわりに

ソレルスにとってグノーシスがいかなる価値を有しているのか、その一端がこの質疑応答から見えてくるはずだ。グノーシス派によると、言葉の受肉、死、復活というのは、イエスに限られた体験ではない。呼びかけとしての言葉、そして言葉の姿をまとった知識に応じるものすべてに到来する出来事なのである。またこの出来事は一度かぎりのものでもないし、復活したわたしは永遠に死なないということでもない。言葉が受肉し、古いわたしが死に、わたしが復活するのは、その場ですぐに起こることであり、その瞬間にわたしは死に打ち勝っている。しかしわたしはそれによって劇的に変化するわけではないし、そのような復活はそれ

をかぎりに永遠の世界に入るのでもない。この世においてそれはその後何度も繰り返されるのである。ソレルスはこれを次のように述べている、「第二の誕生としての復活についての知恵は、絶え間なく与えられ、繰り返し与えられるのです。この知恵は決して獲得されません」。ごく初期からソレルスはみずからのエクリチュールに他のテキストを引用し、織り交ぜてきた。その引用するという行為をグノーシス派的に解釈してみると次のようになるだろう。ソレルスがたとえばロートレアモンのある一節を引用する。それはソレルスがロートレアモンのテキストからの呼びかけに応じていることである。その呼びかけに応じるときロートレアモンの言葉がソレルスのうちにおいて具肉する。このときソレルスのなかの古いわたしは死ぬ。そしてロートレアモンの言葉とともに復活したソレルスは、そのとき死に勝利している。短いが持続する覚醒。しかしこのような言葉の受肉、死、復活という体験はその後何度も繰り返される。これがソレルスにおける「時間の内部そのものでの死に対する勝利」というものの実態であろう。そしてソレルスのエクリチュールはこのような体験を書きとめていったものであるように思われる。

読むという行為、引用するという行為、書くという行為。人文系の研究者なら普段当たり前のように行っている行為であろう。それをグノーシスの観点から解釈し直すという

のは新鮮ではある。またソレルスの見方からするとダンテもサドもランボーもロートレアモンもハイデガーもラカンもグノーシス派だということになる。つまりキリスト紀元数世紀のあいだに実在したグノーシス派だけをソレルスはグノーシス派であると呼んでいるわけではないのだ。かれにとって真理の言葉を発するものはみな、グノーシス派以前のものであろうと以後のものであろうと、グノーシス派なのだ。

しかし実際のグノーシス派は現世にたいしてあまりに諦念的ではなかったか。イエスのほうがまだ現実社会に波乱を引き起こす分だけ現世の生に関わっているのではないか。グノーシス派的な社会と光の善悪二元論は逆に社会に対するニヒリズムを蔓延させはしないだろうか。ソレルスは「社会的なもの」を敵視するあまりみずからが有している社会性を閉却していると思われる。またかれはローマ教会の普遍性、統一性、一体性を信じて疑っていないが、その普遍性はムスリムやヒンズー教や仏教に通ずる普遍性なのかどうか。もし本当の普遍性があるとなればそれは「地球規模の」普遍性であるべきではないのか。このような疑問を感じないわけではないが、しかしソレルスのこのグノーシス論が『時間の旅人たち』を讀解するうえで参考となるものであることは間違いない。そのことを確認してこの辺でやめておくことにする。

フィリップ・ソレルスとグノーシス

小山 尚之

(東京海洋大学大学院海洋科学系海洋政策文化学部)

要旨： この記事はフィリップ・ソレルスの「救済としての知識」（これはソレルスとグノーシスとの関係を語っているものだが）を日本語に翻訳したものである。その小説『時間の旅人たち』（2009年）でソレルスはナグ・ハマディ文書から多くを引用している。グノーシス派にとって「救済」はひとが「言葉」を聞き具肉化する時に訪れる。具肉した言葉、死、復活はキリストにのみ限定されておらず、「言葉」の呼びかけに応じたものすべてが繰り返し起こる体験なのである。フィリップ・ソレルスはその初期からみずからのエクリチュールにおいてたくさんの引用を実践してきている。かれはみずからのエクリチュールの方法をグノーシスの光のもとに再解釈しているようである。かれがかれのお気に入りの作家から引用するとき、かれは「言葉」を受肉している。その瞬間かれの内部で復活がなしとげられ、かれは死に打ち勝つのである。

キーワード： ソレルス、時間の旅人たち、ナグ・ハマディ、グノーシス、言葉、復活